

氏 名 塩 路 有 子

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第482号

学位授与の日付 平成12年9月29日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの

文化人類学的研究

—文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相—

論 文 審 査 委 員	主 査	助 教 授	吉 田 憲 司
		教 授	石 森 秀 三
		教 授	大 森 康 宏
		教 授	佐 藤 誠 (熊本大学)
		助 教 授	吉 野 耕 作 (東京大学)

論文内容の要旨

本論文は、英国コッツウォルズ地域の町チップング・カムデンにおける文化遺産の保全をめぐる住民の境界意識の重層的位相を明らかにし、イングランドのカントリーサイドにおけるエスニシティの形成メカニズムを文化人類学的に考察したものである。本論文は、1995年から99年までのあいだに3回にわたって同町で実施した通算20ヶ月におよぶフィールドワークによって得たデータにもとづいている。

序章における問題提起に続いて、第1章では、イングランドのカントリーサイドとコッツウォルズ地域およびチップング・カムデンについての19世紀末以降の状況を概観した。産業革命以降の英国内外の激しい社会変化によって、イングリッシュネスが希求されるようになり、とくに人々の帰属意識はイングランドのカントリーサイドに向けられた。それは、19世紀末にコッツウォルズ地域に向けられ、職人的な手作業をめざしたアーツ・アンド・クラフツ運動やイングランドの伝統的ダンスであるモリス・ダンスの収集という民俗復興の動きも生じた。チップング・カムデンでも、20世紀初頭にロンドンから移住してきたアーツ・アンド・クラフツ運動の建築家アシュビーと職人たちが、古い建築物を修復し、文化的行事を催すなど、町を文化・社会的に復興した。ついで、画家グリッグスはカムデン・トラストの創設や牧草地の保全など、その後の町の保全活動の基盤を築いた。現在の町は、文化財密度が国内第2位と歴史的建築物が多く、景観保全地域と自然景勝特別保護地域に指定され、文化遺産保全団体が数多く存在する。同町の住民は、都市からの移住者である「インカマー」、同町で生まれ育った「カムドニアン」、町の周辺地域で生まれ育った「ローカル」という彼らの呼称で分類されている。

第2章では、19世紀末から20世紀末まで、チップング・カムデンに注がれてきた「外からのまなざし」と住民の対応について明らかにした。観光客が増加した19世紀末に、住民は「古きイングランド」のイメージを利用して町を活性化しようとし、同時期に出版された全国版案内書に描かれた町には、イングランドのカントリーサイドのイメージが投影された。現在、政府観光庁は文化遺産観光を促進しており、観光庁や行政府の観光パンフレットには、イングランドのカントリーサイドが「イングランドの本質的な場所」として神話的に描かれている。住民は観光による「ソト」との接触をある程度まで規制しているが、「外からのまなざし」に呼応して、イングランドのカントリーサイドの観光イメージを町に創り出している。

第3章以下は、住民によるモリス・ダンス、文化景観、伝統行事という文化遺産の保全をめぐる境界意識とイングランドのエスニシティの形成について考察した。第3章では、二つの伝統行事に共通するモリス・ダンスがイングリッシュネスを演出する一方で、カムデンの独自性を示す役割があることを明らかにした。町のモリス・ダンスを継承するカムデン・モリスメンは「イングランドの伝統的な踊り」を継承するチームという意識が強く、町への帰属意識と伝統観が共通している。

第4章では、町の文化景観の維持をめぐる住民間の対立の一方で、収斂されたイングランドのカントリーサイドの景観が維持されていることを明らかにした。「カムドニアン」の転出と「インカマー」の転入という町の社会変化による住宅高騰は、居住場所に両者の経済格差を反映し、前者を町の周辺的な場所に追いやり、後者を中心的な場所に居住させ

ている。「インカマー」から成る景観保全団体のカムデン協会は、労働者階級で生産者側の「カムドニアン」の生活を無視して景観保全を主張するために、「カムドニアン」は「インカマー」に反感を抱いている。それは「カムドニアン」が「ウチ」、「インカマー」が「ソト」という同町に潜在化している新旧住民の社会・経済的対立の構図である。しかし、宅地開発問題に対して、世論を通じた意見交換が住民間に「カムデン住民」としての一致の姿勢を生み、結果的に「インカマー」の景観認識にもとづく、「外からのまなざし」にもみられたイングランドのカントリーサイドの神話的な景観が維持されることになった。

第5章では、17世紀に創始されたドーバース・ゲームスおよび中世の五月祭に起源があるスキヤトルブルック・ウェイクの二つの伝統行事の運営を通して、「古きイングランド」という住民共通の伝統の創造が行われていることを明らかにした。ドーバース・ゲームスは、職業や社会階級に関係ない地元の人々によって運営され、80年代に「インカマー」が増加して以降、運営委員会の委員の条件や運営方針にカムデンや「カムドニアン」に対する強いこだわりはなくなってきた。この点で、同運営委員会内部での境界意識は薄れてきたといえるが、行事の内容をめぐって、歴史的側面を重視する「インカマー」の長老派と現代的な娯楽性を追求する「カムドニアン」委員の間に、新旧住民の文化景観に対する姿勢の違いと同様の傾向があった。一方、スキヤトルブルック・ウェイクは、「カムドニアン」とカムデン在住が暗黙の運営委員の条件であり、その職種や階級はまるで過去の町の社会構造の縮図のようである。同運営委員会は、「ウチ」の人々による委員会としての意識が強い。しかし、運営委員たちが「毎年全く同じ」や「非常に伝統的な行事」と重視する行事の広場での催しは、ヴィクトリア朝時代に中世の「楽しきイングランド」を求めて復興された全国の五月祭と同様の様式で行われていることが明らかになった。

終章では、各章の総括を行い、文化遺産の保全にかかわる人々内部での多様な「ウチ」と「ソト」の境界意識とその揺れが生じている状況、さらにコミュニティ外部の「ソト」とのせめぎ合いがあることを明らかにし、それによって表現されているイングリッシュネスについて考察した。このような境界意識の重層的な図式は、モリス・ダンスにおいてはイングランドの伝統文化、文化景観においては収斂されたカントリーサイド、伝統行事においては古きイングランドというイングリッシュネスの形成を導いている。それは「カムデン・モリスメン」や「カムデン住民」「カムデンの焦点」などチップング・カムデンという場所を媒体としながらも、同町の独自性を強く打ち出すのではなく、文化遺産の保全にかかわる「ウチ」と「ソト」の人々が共有できるイングリッシュネスであり、カムデンらしさがイングリッシュネスに包摂されている状態である。つまり、二者間の差異は存在したままで、さらなる外集団の存在によって、イングランドのエスニシティを強化して表現する必要が生じたのである。結論として、このような境界意識の重層的位相がイングランドのカントリーサイドにおけるエスニシティの形成を導いているということが出来る。

論文の審査結果の要旨

本論文は、英国コッツウォルズ地域の町チップング・カムデンにおける文化遺産（無形文化財を含む）の保全・継承・創出の様相を歴史的かつ同時代的視点から検証し、イングランドのカントリーサイドにおける文化的アイデンティティの形成の過程とそのメカニズムを探ろうとした論考である。

本論文は、序章において、主としてエスニシティをめぐる先行研究を検討し、本論文の課題を明らかにしたうえで、第1章ではイングランドのカントリーサイドのイメージの形成過程を概観し、さらにカントリーサイドを代表するものとしてコッツウォルズ地域、なかでもチップング・カムデンが注目されるにいたった経緯を論述している。第2章では主としてパンフレット類を通じて、チップング・カムデンの観光イメージを分析し、さらにはカムデンの住民内部にある観光に対する認識の異同を検討している。第3、4、5章では、20世紀を通じてイングリッシュネスを求める際のよりどころとされてきた、3種類の文化遺産、すなわちモリス・ダンス、文化景観、伝統行事をとりあげ、それぞれの事象をめぐる、インカマーとカムドニアン、すなわち新旧住民の認識の差異と重なり合いを詳述することで、内と外、自己と他者をめぐる境界意識の重層性を明らかにしようとしている。最終章では、それらの議論の総括が行われており、残された課題の論述によって本論文が結ばれている。

本論文は、題目にも示されるとおり、チップング・カムデンの住民のアイデンティティの重層的なありかたを、エスニシティをめぐる一連の議論の延長線上でとらえようとした試みである。イングリッシュネスという概念をめぐるイングランドのマジョリティのアイデンティティのありかたをエスニシティと関連づけて分析を試みた点は、本論文のユニークな着想とみなすことができる。もとより、住民のアイデンティティのありかたとエスニシティが連続する問題であることに疑いの余地はないが、エスニシティという概念をめぐる諸説の検討を行いながら、最終的にエスニシティを境界意識との関わりで限定的に定義づけたことによって、議論の展開を制約した点のあることは明らかである。また、集められた一次資料の理論的考察も、類型的な議論に傾いているきらいがあり、改善すべき余地がみとめられる。

ただ、上記の諸点は、けっして、本論文の価値そのものを減じるものではない。本論文の価値は、英国のカントリーサイドを代表するコミュニティに長期間住み込み、自らの観光案内所でのボランティア活動も踏まえて、コミュニティ内部にある観光や文化遺産をめぐる認識や対応の多様なあり方を、民族誌的に明らかにした点にこそ求められる。また、文献資料の渉猟によって、チップング・カムデンにおけるモリス・ダンス、ドーバース・ゲームス、スキャトルブルック・ウェイクの成立過程を歴史的に跡づけたことも、これらの行事が、現代の英国においてイングリッシュネスの具現として多くの関心をよびながら、これまで十分な研究の俎上に載せられてこなかったものだけに、評価に値する。イングリッシュネスという概念の、コミュニティレベルでの受容のありかたを具体的に明らかにした点で、本論文が、英国の文化研究に新たな貢献をなしたのは疑いない。

本論文は、集められた民族誌的事実の分析に関して、いくつかの課題を残しているが、固定的なイメージの枠内だけで語られてしまうことの多い、「英国人の故郷」コッツウォ

ルズを対象に、その内部において、外から押しつけられたイメージが、いかに受容され、いかなる葛藤を生み出し、さらにはいかに利用されているかを具体的資料にもとづいて説得的に描写した点で、民族誌的研究として高く評価できる。総合研究大学院大学の博士(文学)の学位を授与するに足る論考と認定するものである。

なお、英国人の文化的アイデンティティをめぐる英国外からの貢献という本論文の価値にかんがみ、また研究の対象となった地域の人びとへの研究の還元という視点からも、本論文はできるだけ早い機会に英文にて公表されることを期待する。